

文章校正における基本ルールへの意識の重要性

根本 悠佑[†] 稲積 宏誠[†]
[†] 青山学院大学社会情報学部

1. はじめに

近年、論文をはじめとした学術的文章を書く技術であるアカデミック・ライティング能力の習得が重要視されている。本学部でもレポート作成の基礎習得に向けた科目として、必修科目「コミュニケーション基礎」が用意されている[1]。本研究では、アカデミック・ライティング教育を文章校正という面からアプローチし、文章表現の改善に踏み込めるカギとなっている要素を形式的な文章ルールから探る。

2. 分析概要

2014 年度「コミュニケーション基礎」履修者のうち、初回授業時に課したレポート(修正前)と 5 回の授業実施後にそれを推敲して提出させたもの(修正後)の両方を提出した 188 人を分析対象とした。まず授業で触れた形式的な文章表現ルールの使用状況を集計し、その評価を修正前後の変化と修正度の観点からグルーピングをした(表1)。

表 1 評価のグルーピング

		修正前→修正後の変化		
		NG 減	維持	NG 増
修正後	NG なし	しっかり直せた	元々問題ない	
	NG あり	直しきれていない	直していない	悪化

3. 基本ルール:文末の統一に着目した分析

形式的ルールのうち、文章を書く上で最も基本的な事項の一つである「文末の統一」ルールの順守状況を確認したところ、問題のある学生の共通点として、段落分けへの意識欠如の傾向が見られた。文章上で望ましいとされている 1 段落=5 文からの差の平均値を見ると、問題のある群ほど値が大きく、修正後に文末を改善できた群ほど段落わけ状況も改善されている。

4. 基本ルール:話し言葉に着目した分析

つぎに、基本ルールである話し言葉の不使用が与える影響を検討する。修正必須度を SA(最必須)~B(準必須)のどのレベルまで順守できているかについて修正前後の各レポートを全 OK, B_NG, A_NG, SA_NG の 4 段階で評価する。162 人の学生を 16 群に分類した結果を表 2 に示し、表 3 に、感想文的な表現を用いないというルール(以後感想文)との関係を示す。A 群については、感想文ルールを順守している学生の比率が高く、BCDGH 群についても改善の取り組む比率が高い。一方、EF, IJKP 群には、感想文的表現を修正していない学生が他群より多い。このように、話し言葉への意識と感想文などの形式的ルール両者への意識の関連性の強さが示されている。

さらに、話し言葉への意識とその他の特徴量(文長・品詞含有率等 11 項目)との関係を見るために、話し言葉改

表 2 話し言葉の修正レベルによる分類

	全 OK(後)	B_NG(後)	A_NG(後)	SA_NG(後)
全 OK(前)	A	E	I	(M)
B_NG(前)	B	F	J	(N)
A_NG(前)	C	G	K	(O)
SA_NG(前)	D	H	(L)	P

表 3 話し言葉群ごとの感想文使用状況

群	元々問題ない	しっかり直せた	直しきれていない	直していない	悪化
A	54%	14%	11%	18%	3%
BCDGH	33%	20%	40%	0%	7%
EF	38%	16%	20%	27%	0%
IJKP	40%	10%	20%	27%	3%

善(CDGH)群と非改善群(KP)を分類するモデルを構築した(図 1)。改善群ほど漢字/サ変名詞を使用できており、文長が長くなればそれを補う接続詞(順接/逆接)が使用できていることが示されているわかる。実際に、話し言葉を意識できた群ほどサ変名詞の含有率が高く、話し言葉の改善との関係性が示されている(表 4)。また、漢字/サ変名詞の増加は漢語表現の増加につながることから、こうした学生の中には文章表現が向上している例が多く見られる。

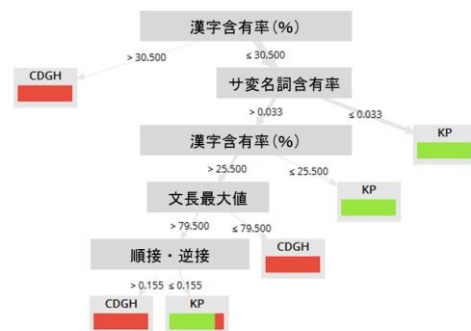


図 1 話し言葉修正群の分類モデル(決定木)

表 4 話し言葉群ごとのサ変名詞の使用状況

話し言葉	修正前	修正後
A	4.09%	4.29%
BCDGH	3.81%	4.18%
EF	3.80%	3.87%
IJKP	3.04%	3.15%
総計	3.79%	3.95%

5. まとめ

文章作成の基本ルールの修正状況と文章校正への取組との関連性を示すことで、基本ルールを強く意識することが文章表現の改善につながるのと示唆を得ることができた。文章の形式に関する基本ルールへの理解と文章表現や内容の向上の関連性の詳細な検討が今後の課題である。

参考文献

[1] 小堀怜美他「日本語文章作成への意識と文章評価に基づくライティング教育の支援に向けて」日本教育工学会研究報告集 14(1), pp.189-192, 2014